

水上勉全集
11

水上勉全集 第十一卷

昭和五十二年三月一日印刷

昭和五十二年三月二十日発行

著者 水上 勉

発行者 高梨 茂

印刷者 白井倉之助

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京二二三四

検印廃止

©一九七七

目次

桜守

冥府の月

坊の岬へ

破衣の人

櫓の花

貴船川

竹の花

あとがき

477

461

421

395

377

279

171

3

桜 守

五歳か六歳の頃、木樵の祖父について、背山の九十九折の道を登った。山は栗、櫟、樺の類が多かった。いくつも谷があった。朽ちかけた危なかしい丸木橋も渡った。大岩の下をくぐることもあった。込んだ樹の下を、子供の足で三十分ほど登りつめると、急に馬の背へ出たような、陽あたりのいい平坦地へきた。祖父はここで一服した。片側は高い杉山で、枝落しのすんだひょうろ長な杉が、割箸でも立てたみたいに見える。片側は落ちこんだ谷で、足もとまで落葉樹の巨木が茂っている。尾根のそこだけが疎林なので、褐色の肌に、薄茶の横縞のみえる木が目についた。なんの木だかわからなかったが、陽にぬれてひかる肌をみていると、祖父の腰につるしたどうらん（煙草入れ）の貼皮に似ていた。これが桜だとわかるのは、祖父の死ぬ前年だから九歳の時である。花ざかりの四月半ば、やはりここへきて、

「弥やよ、山桜が満開や」

と祖父がいった。はじめて山桜の名をおぼえた。桜の下へ祖父は木端の大きなのをあつめて、地べたに敷いて弁当をひろげた。桜は弥吉の手で抱えきれないほど太く、横縞の肌はみなすべすべしていた。どの木もあかみをおびた新葉が出て、花はその新葉のつけ根のあたりに付き、細枝が

たわむほど重なっている。桃色のもあり、純白にちかい空の透けてみえるようないのもあった。どの木も同じ花の木ではなかった。藺で編んだ弁当籠は、朝方、母が蓋のふくれるほど抑えつけて飯をつめたもので、紫蘇の紅が、これも花が咲いたように、飯の上に散っていた。

花には蜂が飛んできた。箸をつかう手にまぶりつくので、弥吉は払いのけてたべた。

弁当をすませた祖父は、竹筒の水をひと口呑んでから立上がると、桜をいちいち点検するように、花を掌にのせては眺めていたが、とある一本の、弥吉の腕ほどの細さの、薄紅色の花の下までくると、腰につるしていた鉋をひきぬいて、刃先を、光った木肌にたてて縦に線を入れた。木はうすみどりのもう一枚の皮をもっていて、糸のような汁をつたわらせた。弥吉は、皮膚のどこかを小刀で切られたような痛みをおぼえて、眼をつぶった。

「弥ア、ゆこ」

と祖父は木挽小舎の方へ歩きはじめた。

一日かかって、祖父が一本の杉を倒すのをみた。三日も四日もかかって、九十九折の谷道に一尺あまりの栗材をそろえて、木馬道をつくるのもみた。おそくまで山で働くので、鐘がきこえないと降りなかった。学校へ入るまで、弥吉は、爺っ子といわれるほど祖父のわきばかりにいた。家にいる時間より山にいる方が多かった。一どだけ、母が登ってきて、祖父と仲よく話しこんでいるのをみた。まだ、尾根の桜が散っていなかったから、祖父が死ぬ前年の春だったと思う。

父は、京の寺や神社の普請へ出ていたので、一と月もふた月も帰らない日があった。母は、村しもの小作田を作って、祖父と弥吉が山ばかりなので、家では独り居が多かった。田仕事のほか

に、弁当ごしらえだとか、洗濯や、つぎもので忙しいので、めったに山へきたことがなかったのに、その日だけ、朝早く、ふたりのあとを尾^おいてきた。

祖父は小舎の前に木端をあつめて火を焚^たいた。母とむきあって、話しこんでいた。話の様子は、父のことらしい。弥吉はのけものにされた思いがして、雑木山へ入り、岩なしをとった。岩なしは、ゆるやかな傾斜地の古株の下を這っていた。薄みどりのまろい実は酸^すっぱいけれど、甘い汁が舌にのこった。口のはたが、実の色に染まるほどたべて、弥吉は小舎に走りもどった。すると、祖父と母は小舎のまわりにいず、火が消えていた。弥吉は急に淋しくなつて、尾根づたいに桜山の方へ歩いた。と、不意に足もとから、母と祖父の笑う声がした。満開の桜の下だった。遠目だからはっきりしないが、かわいた地べたに、白い太股をみせた母が、のけぞるように寝ていて、わきに祖父がいた。家では、いつもいらしている母が、楽しそうにはしゃいでいる。弥吉は、いかにも秘密めいた感じが、そこにあるような気がした。よぶのに気がひけて、しばらくだまつてみていてから逆もどりのした。見てはならないものをみたような、一瞬、はずかしい気持が襲^襲った。弥吉は眼を閉じて歩いた。と、立止った所に、一本の桜があった。小菊の花でもみるような、薄紅の花びらを何枚もかさねた大輪で、一匹の蜂が花の中へ頭をつっこんでいた。蜂は蛹^{さなぎ}型の尻を小さく振った。蜜をすっているのだと思った。

祖父はこの年の翌年二月、まだ雪のあるうちに急性肺炎になり、納戸^{なんど}に寝ついて、十日目に死んだ。弥吉が十歳、鶴ヶ岡の小学校で四年生であった。尾根の桜が野中道から遠目にみえる四月がきて、木挽小舎で祖父のひくガンドの音がしていると思った。

母は祖父の死んだ翌年一月に、離縁になって雲ヶ畑へ帰った。理由はわからない。それから半年たつて、京都から新しい母がきた。色白だったが、眼のつりあがった瘦せた女だった。冷たい感じがして、弥吉は、このひとになじめず、雲ヶ畑へ帰ったきりで消息をたつた、ぼっちゃりした母の顔ばかり睨にうかべていた。六年を出るころに、この母が雲ヶ畑から岐阜へ再婚したときいた。それきり弥吉は、実母の消息をきかない。

父は、あいかわらず、京都へ仕事に出ていた。新しい母が留守を守った。弥吉は孤独な気持で六年を了えた。十四歳の六月、父のすすめで京都の植木屋「小野甚」へ奉公にきた。京都府北桑田郡鶴ヶ岡村大字洞戸。弥吉の在所は世にいう「丹波の山奥」である。十四歳まで育ったこの在所へ、足しげくは帰らなかった。のちに異母弟が二人と妹が一人うまれたときいた。嬉しさはなかった。ただ、春がくると、背山の九十九折の谷奥の、桜山の景色がおもいだされるだけだった。京でみるような、葉のない花ばかりの、白っぽいものではなく、やわらかい赤みをおびたうすみどりの新葉のつけ根に、大ぶりの花弁のつく山桜である。目をつぶると、尾根の土がばんばんにわいて、平坦な疎林がひらけ、満開の下で祖父と母が笑っていた。

京都の植木屋「小野甚」は、むかしは門跡や禅寺の庭づくりもした由緒のある老舗だった。弥吉が奉公した昭和五年は、当主の甚一郎が亡くなる直前で、もう長男の甚市が継いでいた。甚市は、なまくら者で、先代の元気なころは、得意先も廻ったのに、老父が死ぬと、仕事ぎらいになり、放蕩をはじめた。花背の山と、出町の土手下にあった苗圃を売りに出し、鞍馬口堀川の角の、

門のわきに石ばかりたくさんならべた本家に、遠縁筋からもらった若い嫁と娘をおき、自分は先斗町、祇園で流連をつづけた。弥吉は、この若主人につかえて、植木のことを初歩から教わったが、主人の放蕩ぶりをみて、鶴ヶ岡の父のことを思いだしていた。左前になっても「小野甚」には、昔からの職人がいた。中に橘喜七という三十すぎの、背のひくい男がいた。石のことなら何でもくわしくて、石の喜七といわれた。弥吉は喜七に庭づくりの手ほどきをうけた。約十三年間、小野甚と染めぬいた法被をきて、喜七の下で精を出した。庭樹一切の移植、根廻し、掘取り、運搬、植付け、保護手入れ、みなならった。喜七は偏廂者だった。ほかの職人と馬が合わなかったが、なぜか弥吉とだけは気が合った。弥吉も無口で、陰気な方だが、喜七は何ぞというとき弥吉をつれて行った。歩きながらよくしゃべった。たとえば軒下の雨だれ石一つみても、あれは物を考えとる、なんも考えとらん石の方がええ、といった。鞍馬口の門の前の、驚いろの吉野石、茶色がかった美濃石、黒ずんだ貴船石、弥吉にはただの大石にしか思えない一つ一つを撫でて、石にも氣質があるでエ、と喜七はいった。

いまの、桜山の主人の竹部庸太郎の下で働くようになったのも、もとはといえば、喜七の世話で、もっとも、「小野甚」をやめねばならない時期もきていた。日中戦争がはじまって、世間はあわただしくなり、庭仕事も少なくなった。左前になった本家の、大切なお得意を自分請負に切りかえて、独立する謀反組も出た。甚市は、家業を省みないばかりでなく、危険なあずき相場に手を出し、大損すると、店の看板であった門前の石も売った。喜七をはじめとする律義組が眉根をしかめるのに、目もくれず、放蕩のあけくれであった。職人はよその庭師へ出働き、「小野甚」

は日々仕事が減った。そんな店で、いつまでも辛抱していることは、ためになることではなかった。弥吉はまだ若かった。竹部のような、山持ちで働くのだったら、将来性もある。竹部は広大な桜山の持主で、桜の研究では日本でも一、二を争う在野の人であるとか。武田尾にある二十一万坪近い演習林は、百数十種に及ぶ山桜の園である。そのほかにまだ向日町むこにかなりな苗圃もあり、桜ならでは夜もあけない人だときいた。この人の下で働くのなら、桜にばかりかかりきっておればよいのだし、喜七のはなしだと、通勤でも、寝泊りでもよく、こっちが希望なら、演習林の番小舎を住居にしてよい、そこで世帯をもってもよいという好条件であった。勿体ないような旦那さんや。喜七が、少し前歯の出る味噌っ歯をせわしなくうごかして、竹部のことを説明するのを、弥吉は椎茸しいたけのような耳をひらいてきいていた。

「小野甚」にいては、うだつはあがらない。それは弥吉にもわかる。しかし、はっきりした理由なしに辞めてゆくわけにゆかなかった。同じ辞めるにも、喜七ではないが、最後まで残る組にまわっていたいと弥吉は思っていた。門跡や、禪宗寺院の、雑誌のグラビアにも載る庭園など、「小野甚」の法被を着てゆけば、未だに裏口から入れる誇りも捨て切れなかったのだが、しかし、もう樹の手入れなどで、喜七がいくら講釈しても、左前の「小野甚」の職人が何をいうか、といった顔で、三時の茶も出してくれない得意先があった。ものには時機というもんがあるなァ、と喜七がいうので、弥吉も思い切って竹部へつとめ替える決心がついた。経過はまあ、そんなふうなものだ。本心をいえば桜に惹かれた。桜のことなら日本で一、二を争う研究家、武田尾に二十一万坪もの演習林をもち、桜一途に生きてきたという、竹部庸太郎につかわれてみたかった。

だまりこくった石にも氣質があると教えた喜七が、おまえのような無口な独り者のゆくとかや、ともいったのである。

背丈は五尺そこそこのチビで、顔は小造りで鼻が低く、陰気な感じだ。その顔に反比例して、生椎茸みたいな、大きな耳をもつ弥吉は、どうみても丹波の大工の子であった。その弥吉をつれ、橋喜七が、阪急電車の岡本駅を降り、山手へ十分ばかり歩いて、屋敷町にある竹部庸太郎の家を訪ねたのは、昭和十八年の六月、梅雨空のうっとうしい一日である。川沿い道を歩きながら、「まあ、会うてみるとわかるが、えらい人や。調度という調度はみな桜で。灰皿から茶托から、机から、本棚から、みな桜や。茶碗の柄まで桜の花やった……」と喜七はいった。ついその年の春、大阪の中之島に大きな屋敷があったのを、思い切りよく竹部は空屋にし、別宅にしていた岡本へ越していた。「七条の樽橋さんと懇意でなア。わいも樽橋さんのたのみで引越しを手つどうたんやけど、仰山の荷物で……、桜材をつこたもんばかりうじゃうじゃしとった。……お遍路さんの杖みたいなもんみせてもろたが、ようみると、うるし塗りで、金の蒔絵やな。こまかい桜の花やった……たべはる箸から、箸箱、煙草入れまで、みんな桜や」

きいていて、弥吉は、祖父が腰につるしてはどうらんのことを思いだした。あれも山桜の貼皮だったと思う。そういえば、鶴ヶ岡の家に、桜材をつかった大火鉢が一つあった。祖父の愛用した菓子盆も、桜の皮が貼ってあった。喜七はん、あんたはどこでそんな人と会わはりましてんや、ときくと、喜七は、「樽橋さんとかや」といった。樽橋というのは、七条の駅前で、かなりな旅館を経営している人で、本宅が千里山にあって、七条にはかなりな庭もあり、樹の手入れに

弥吉もよくいった。その樽橋が関西財界人の集まるクラブに出入りしていて、竹部と懇親になったのだと喜七はいう。

「わいも、お寺や重役さんの家へ仕事にいつて、奇人変人に会ったことはあるが、竹部はんのような人はじめてや……」喜七はしきりと感心して、「桜好きやいうても、大学の農科出やないんやでエ。東京の赤門は出てはるけど、法科やったそうな。ふつう東大の法科出たちゅえや、出世はきまったようなもんで……官吏にならしたら、寝てても局長はんか、知事さんやろ。ところが、人につかわれるのんが性にあわん、何かするのんやったら、人のやらんことやってみよ……いうて、学生じぶんから桜の研究に没頭しやあった……ずうっとそれから、桜ばかりやな」

変った人がいるものだと思ふ。

二、三ど会っただけだが、石の好きな男なので興味をもっていた京の植木職が、まだ自分よりひとまわりも小柄な若者をつれて、玄関へきた時、竹部庸太郎は、うしろでうつむいている弥吉をじろりとみて、だまって玄関横の応接間へ通している。五十七にしては恰幅かっせきのいい、五尺七寸もある竹部の、肩の張った体軀と、心もちへの字にひきしぼった口もとと、柔和な眼ではあるが、形のいい眉毛が、太く両脛の上にかぶさっているのが印象的で、最初弥吉は、京のどこかの和尚さんの顔や、と思った。喜七が、電話していたので、弥吉をつれての目的は、竹部にわかつていたらしく、奥から五十すぎたかすぎないぐらいの小柄な女中さんが、茶を出してひきさがる

と、「兵隊の方はどないですか」と竹部はきいた。喜七が返事しろ、と眼で合図するので、「丙種どす」と弥吉はこたえた。「そら、よろしな。ゆかずにすめば、こしたことがおへん」

竹部は、はじめてにっこりして弥吉をみた。永年省みなかった鶴ヶ岡の在所へ、兵隊検査で六年ぶりに帰った。洞戸の同級生とつれだって、谷しもの本校の講堂でうけたその検査で、背丈が足りないというだけの理由で丙種になり、つまり国民兵役に編入された。当時は支那にも満州にも、陸海軍が進出していて、兵隊にゆかぬと非国民のようにいわれた時節である。丙種でしたとこたえる気持に、いささかの恥ずかしさもおぼえたが、喜んでくれるような竹部の顔に、弥吉は、不思議と温かみを感じて、うつむいた。

「嫁はんは……どうですねんや」

と竹部がきいた。「へえ」喜七が、もじもじしている弥吉をみて、「もうぼちぼちもらわんとあかんいうて、わしも、すすめてますねんやけど。なにせ、小野甚が、先生もご存じのように、あんな調子どっしゃろ。本人も今日までは修業の身ですし、そこまではまだいってまへんでした。先生とこにお世話になって、一生懸命働くなら、また、どこぞに縁があつて、嫁さんにしてくれという女ごはんもありまっしゃろ。けど、縁のうすいとこがおしてなア」と喜七は、誰がみても、女に好かれそうもない、影を背負った陰気な顔の弥吉を、かばうように、ふふふとわらった。竹部は、にこにこして、きいていたが、「まあ、せかんでもよろし。縁はどこにでもありますわ」といってから、

「鶴ヶ岡にはまんだ、お父さんもお母さんも健在ですか」

「へえ、それが、十一の時に、わたしを生んだ母親は離縁になって里へ帰りました。雲ヶ畑の人どしたんやけど、まなしに、岐阜の方へ再婚しまして、会うてまへん……」

と、弥吉はこたえた。家のことは、あまり人にいいたくなかった。実際、母がなぜ離縁になったか、そのところは、誰にも説明をうけていない。父が教えてくれるはずもなかった。子供心に、母の離縁は父との不和が原因で、そのために父が京都から戻らなかったのだと思っていた。母が鶴ヶ岡で淋しい暮しをしているものだから、祖父が同情して、母と気のあった晩年をすごして死んだ。父は早く離縁したかったらしいが、祖父の面倒をみてくれるものがなかったから、祖父の死ぬまで母を鶴ヶ岡に置いたのだ、と村人からきいたことがあった。大人の噂は無責任なことが多くて、子供の耳に、母と祖父とは世間にいえない関係にあった、という人もいた。弥吉はふるふるほどの屈辱をおぼえてはすかしかった。だが、不思議に、母を冒瀆されたかなしみはなく、丸ぼちゃ顔の、明朗な気質だった母が、父にきらわれて、ひとり子の弥吉を育てつつ、祖父の面倒をみているうちに、つい、越えてはならぬ不倫の道に足を入れたかと思えば、うなずけないこともない。祖父は、父よりやさしくて、人柄もよかった。母はその祖父に大事にされた、あるいは、祖父が母を大事にすぎたため、父は京へ行ったきりでもどらなかったのか。そのところの順序については、弥吉はまだ、はっきり納得していない。とにかく、いまは、父の後妻となった人がいて、子も三人あり、鶴ヶ岡の在所は、弥吉が帰るべき所ではないというだけのことである。

「雲ヶ畑やったら……わたしも再々行ったことがあります」